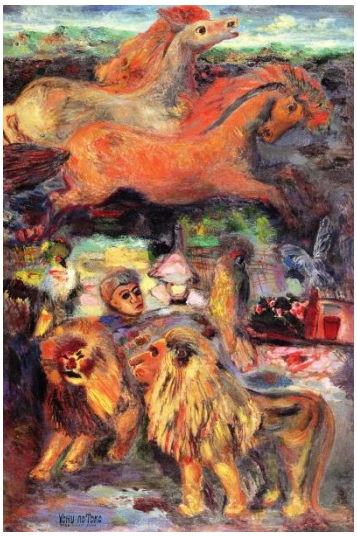
野間仁根 NOMA Hitone

野間仁根（1901-1979／今治市出身）は、東京美術学校（現・東京藝術大学）西洋画科で学び、1924（大正 13）年二科展に初入選後、1928（昭和 3）年の第 15 回展で《夜の床》が樗牛賞を、翌年の第 16 回展で《ぜ・ふうるむうん》が二科賞を受賞、1930 年会友、1933 年会員となり、1955（昭和 30）年に退会するまで、長らく二科会を活動の舞台としました。二科会退会後は、鈴木信太郎らと一陽会を結成し、戦後は個展を中心に活動しました。

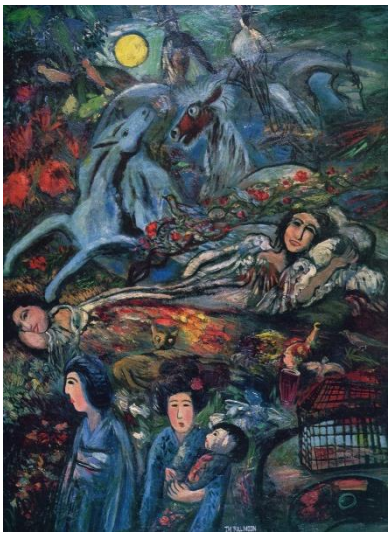
フォーヴィスムやシュルレアリスムの影響が濃厚な二科会時代の幻想的な作風から、戦後は独自の童心あふれる伸びやかで奔放な作風へと展開しましたが、自ら「蚕が絹糸を吐くように自然に生まれるのが本物の絵だ」と述べるように、生涯一貫して自由で屈託のない世界観を追及しました。

当館には、油彩画約 60 点、水彩・素描約 30 点の野間作品が収蔵されており、代表作をはじめ、初期から晩年まで活動のほぼ全てを網羅するコレクションになっています。

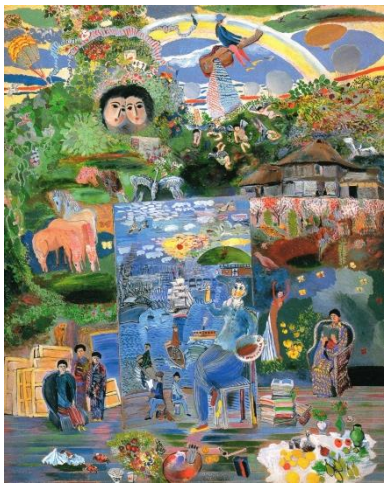
《静物》
1924（大正 13）年
油彩／画布
112.2×145.3cm



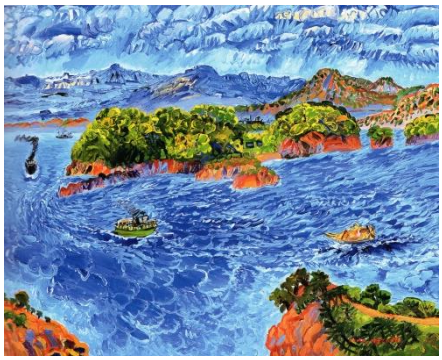
《夜の床》
1928（昭和 3）年
油彩／画布
195.0×135.0cm



《ぜ・ふうるむうん》
1929（昭和 4）年
油彩／画布
91.4×62.0cm



《画室》
1933（昭和 8）年
油彩／画布
162.0×130.3cm



《来島水道仲渡島附近》
1967（昭和 42）年
油彩／画布
72.7×91.0cm